研究ノート

—国立大学入学者選抜研究連絡協議会 共同研究プロジェクト—

大学入試センター試験における地歴・理科Ａ科目および国語Ｉの受験動向調査

研究開発部　内田照久・林　篤裕・岩坪秀一

国立大学入学者選抜研究連絡協議会会長／大阪大学大学院法学研究科教授　松岡　博

大学入試センター試験では，学習指導要領の新課程への移行に伴い，平成９年度から新科目として地理・歴史のＡ科目，理科ＩのＡ科目，及び国語Ｉが導入されている。Ａ科目の高校での標準履修単位数は，Ｂ科目の４単位に対し２単位である。また国語Ｉは高校の必修科目であり，その内容を総合的に発展させたものが国語Ⅱである。これらの新科目の受験にあたっては，高校での履修要件等の制限は特に設けられておらず，大学が個別に科目指定を行っている。

大学入学後の教育を考慮した場合，新科目を選択した受験者が，どのような学習の背景をもっているか把握しておくことは，新科目を入試科目として指定する際の参考となる。

そこで，国立大学入学者選抜研究連絡協議会（略称「入研協」。会員は国立大学及び大学入試センター研究開発部教官）において，大学入試改善研究の一環として，センター試験の受験科目と高等学校での履修科目との関係を調査・分析する大学間の共同研究プロジェクトが発足した。これは，平成９年度から11年度まで３年間実施されたが，このたび，プロジェクトの終結にあたり，調査結果の概要を報告する。

共同研究プロジェクトに参加した国立大学は，平成９年度49大学，平成10年度54大学，平成11年度52大学であった。調査の対象は，平成９－11年度センター試験受験者の中で，(1)地理・歴史におけるＡ科目（世界史Ａ，日本史Ａ，地理Ａ），(2)理科ＩにおけるＡ科目（物理ＩＡ，化学ＩＡ，生物ＩＡ，地学ＩＡ），(3)国語における国語Ｉを受験した者であった。

調査は，各年度とも５月下旬から７月下旬にかけて実施され，参加大学の入試担当関係者の責任のもとで集計がなされた。その統計的集計結果をもとに，大学入試センター情報処理課，及び研究開発部のスタッフが全体の集計整理にあたった。

本プロジェクトにおける３年間の調査結果を通じて，比較的安定して見出

された傾向は次の通りである。

(1) 高校において地歴や理科のB科目や国語Ⅱなどを履修してきた者が，かなりの割合でそれぞれの教科のA科目や国語Ⅰを受験していることが示された。その傾向は，特に物理ⅠA，化学ⅠA，生物ⅠAにおいて顕著である。

(2) 地理A，地学ⅠAについては，高校で該当科目の未履修の者による受験が，多数あることが見出された。

(3) その地理A，地学ⅠAの未履修受験者の大学合格率は，A科目履修者によるA科目受験での合格率より高く，また英語の成績もやや高いことが示された。さらに，その受験者においては，大学入試センター試験の相補的な時間枠で受験可能な，同系列教科の別科目を受験している割合が高く，そちらの成績の方がむしろ高いことが見出された。

なお，本調査の詳細については，入研協発行の大学入試研究ジャーナル第11号にまとめられる予定である。